嚥下内視鏡検査での服薬評価に基づいた『嚥下機能を考慮した服薬指導』の実践

上田 章人 ●医療法人藤仁会 藤立病院 病院長



嚥下内視鏡検査の様子

要旨

嚥下障害のある患者に対し、嚥下機能を考慮した服薬指導の重要性が認識されている。嚥下内視鏡検査は、嚥下造影検査とともに嚥下機能評価のゴールドスタンダードとされ、場所や時間の制約なく実施可能で、被曝のリスクもない。

本研究では、当院入院中の高齢患者を対象に、嚥下内視鏡検査の評価項目に「服薬時の評価」を追加し、その結果を踏まえ、それぞれの嚥下の状態を加味した適切な服薬指導（＝「嚥下機能を考慮した服薬指導」）を多職種での合議の上で提案し、その効果を評価した。初期の予定登録数には達せず、26例を登録した。その結果、7症例で減薬が達成され、2症例では服薬の中止が提案された。今後も引き続き症例の集積を行い、減薬が可能であった症例と、不可能であった症例の比較を行うことを目標とする。

1.背景と目的

嚥下障害のある患者にとって、服薬は困難を伴う行為であり、「嚥下機能を考慮した服薬指導」が必須である。嚥下障害の精密検査の一つとして、嚥下内視鏡検査（videoendoscopic evaluation of swallowing：VE）がある。VEは嚥下造影検査（videofluoroscopic examination of swallowing：VF）とともに、嚥下機能評価のゴールドスタンダードとして広く普及している。VEはVFに比べて、場所や時間の制約なしに実施でき、被曝の恐れもないことが利点として挙げられる。

本研究は、病院入院中に嚥下障害の精密検査としてVEを実施する患者を対象に、VEの評価項目に「服薬時の評価」を追加することによる「嚥下機能を考慮した服薬指導」への貢献度を評価することを目的とした。

2.活動の方法

【対象】藤立病院に入院中の高齢者で、VEを実施する患者のうち、本研究への参加を書面にて同意した患者。

【研究方法】対象患者にVEを実施し、その結果を踏まえ、それぞれの嚥下の状態を加味した適切な服薬指導（＝「嚥下機能を考慮した服薬指導」）を多職種での合議の上で提案し、その効果を評価した。

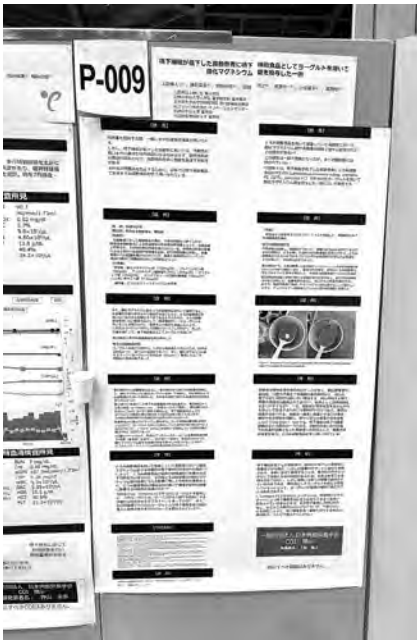
3.現状の成果・考察

新型コロナウイルスやインフルエンザの流行が影響し、登録数は当初の予定に達することができず、26例の登録となった。患者背景を表に示す。

対象患者それぞれの嚥下の状態を加味した適切な服薬指導を多職種での合議の上で提案した結果、26例のうち7症例で減薬を達成した。また嚥下機能障害が著しかった2例については、服薬の中止（貼付薬への変更を含む）を主治医に提案した。



第27回日本病態栄養学会年次学術集会会場にて



発表ポスター

今回経験した症例のうち、興味深い経過をたどった一例について症例報告を行った。第27回日本病態栄養学会年次学術集会で、「嚥下機能が低下した高齢患者に嚥下補助食品としてヨーグルトを用いて酸化マグネシウム錠を投与した一例」として発表を行った後、応用薬理研究会学術誌「応用薬理」に、『Administration of Magnesium Oxide Tablets to an Older Patient with Dysphagia using Yogurt as a Swallowing Aid：A Case Report』として掲載となった〔Pharmacometrics 106 (1/2) 9-11, 2024〕。

Table. Patient Characteristics	
Total	26
Sex (male)	20 (77%)
Age (years)	80.6 (76.5–88.5)

Data are presented as numbers (%) or medians (interquartile range)

患者背景

4. 今後の展望

今後も引き続き症例の集積を行い、減薬が可能であった症例と、不可能であった症例の比較を行うことを目標とする。


Administration of Magnesium Oxide Tablets to an Older Patient with Dysphagia using Yogurt as a Swallowing Aid: A Case Report

応用薬理研究会学術誌「応用薬理」に掲載された原稿①


同②


同③